

随泉寺寺報

平成16年(2004年)11月号 第411号

082-892-0217 <http://ww41.tiki.ne.jp/~tetunari4/>

浄土真宗本願寺派 高峯山随泉寺

秋季門信徒講座

講師 法明寺住職 原田 真澄師

講題 「まことに出偶う」

秋の菊 にほふかぎりは かざしてむ

花よりさきと しらぬわが身を 紀貫之(きのつらゆき)

新潟の中越地震の被害に遭われた方には寒い季節となりました。テレビで見ると限らずには阪神淡路大地震にも匹敵するような惨状です。余震がいつまでも続いて、安心して手足を伸ばして眠れぬ夜は、不安なことでしょう。私達は一番頼りとなるものとしての大地があります。その地面が揺らぐのですから、これくらい危ういことはありません。

お経の中では、確かなものとしての浄土を説いてあります。当てにならない不確かな私を支えてくださる大地・・・それを浄土と顕してくださるのです。どんなことがあろうと決して揺らぐことのない確かな拠りどころ、それがお浄土です。



11月の法座予定

- 11月 8日～15日まで……………菊花展・絵画展
- 11月 14日昼席午後1時より……………門信徒講座
- 11月 14日夜席午後7時半より……………出張法座 長者原西集会所
- 11月 15日朝席午前10時より……………役員研修会
- 11月 15日昼席午後1時より……………門信徒講座
- 12月 2日午後6時より……………門信徒会本部役員会

「帰敬式(おかみそり)」について

帰敬式は私たちがまことの佛教徒になる第一歩として受ける儀式です。帰敬式を受けるということは、私達が佛さまの弟子となり、佛さまの教えを聞いて生きる者となることを明らかにするという事です。つまり、これまで生きてきた自分とは違う、新しい自分が誕生することを意味します。

よく「出家する」と言いますが、出家するためには「得度式」という儀式を行わなければなりません。本願寺派の儀式においても、男子の得度式は丸坊主になります(私はこれが嫌だったな)。「おかみそり」という呼び名はこのときの剃刀(かみそり)から来ていると思われます。



しかし本来真宗は、出家して佛弟子となるのではありません。日常生活の姿(在家)そのままに、「南無阿弥陀仏」を本尊と仰ぐことで、佛弟子となるのです。ですからその儀式は得度式とは呼ばず、帰敬式と呼びます。「おかみそり」と言いますが、帰敬式では髪を剃りません。刃先を丸めた剃頭刀で軽くなでるだけです。これで出家の形になぞらえるのです。帰敬式を受けると、新しく誕生した自分に名前が授けられます。これが「法名」です。法名や戒名を「死者につける名前」だと思っている人が多いようですが、大きな勘違いです。法名はあくまでも佛弟子としての名前です。弟子と言いましたが、お釈迦さまの一字をいただいて、「釋」の一字をが頭につきます。帰敬式は思い立ったときに受けられるのが一番です。よく、葬儀開式直前に故人に対して棺(ひつぎ)の上から、住職がおかみそりをすることがありますが、あれは生前に帰敬式を受けていない人に対して便宜上行っているだけです。帰敬式を受けるのに、早すぎるとか、ましてや遅すぎるということは全くありません。来年の随泉寺開基400年記念法要に、ご本山から帰敬式に出広していただきます。この機にまだ受けておられない人は、ぜひともお受け下さい。

役員研修会

11月の15日今年の役員研修会を開催します。お仏壇の荘嚴の仕方や、仏事の心得、焼香の仕方などをお話していただきます。せっかく役員になっていただいたのですからこの機に正しい作法を身につけましょう。又日頃疑問や不審に思っていることがありましたら、この際お尋ね下さい。

菊花展・絵画展

11月の8日から菊花展と絵画展を開催します。去年のように井原地区の同好の方が丹精込めた菊の花を展示していただきます。今年は代表の浜野さんがなくなられたので寂しいのですが、お元気な頃を偲びながら、楽しみに觀賞させてもらいたいと思います。また、絵画を描かれる方はどなたでも結構ですから展示してください。誘い合わせて観に来てください。

「父との思いで」

父が亡くなる前日、私は広島市内の病院に付き添いました。

その夜は、宇品港の花火大会があり、病室のカーテンをいっぱいにかけて、意識のない父と二人で、夜空に広がる花火を見ました。自然と、私が小さい頃のことを、走馬灯のように思い出され、ずっと父と話しかけていました。

警察官だった父は、転勤が宿命でしたので、県内各地を転々としてきました。宇品にも三年ぐらい住んでいましたので、その当時、花火大会に行ったことはありませんでしたが、とてもなつかしく思い出しました。



私が中学3年生の時、福山の中学校に通っていましたが、交通安全の講演会か何かで、父が来賓として、講堂に座っているのを見つけ、多感な少女にとっては、とても恥ずかしくて、嫌だったことや、また、家族皆でお花見に行き、大変な混雑で、怪我人が出そうな状況になり、父の職業意識から、周りの人々を一括して、これまた、私は恥ずかしい思いをしました。でも今思うと、そんな父を、本当は心のどこかで誇らし

く感じたような気がします。

それやこれや、思い出しながら、父と見る初めての花火大会でしたが、涙は次から次へと溢れ、止まりませんでした。父は気持ちよさそうに、スヤスヤと寝息を立てていました。そして明け方から呼吸が乱れ、家族皆が集まるのを待つようにし、午後、静かに息を引き取りました。

これから先、私は花火大会のニュースを聞きたび、この日のことを思い出すでしょう。

お父さん、長い間、本当にありがとうございました。

合掌

鴨の巣団地 久保木 和恵（奥田泰蔵の長女）



御礼

永代経懇志	拾萬円	浜野須磨子殿	故	浜野 博寿様	特別永代経志として
	五萬円	高田 恵 殿	故	高田 政行様	特別永代経志として
	拾萬円	日下フジエ殿	故	日下 道夫様	特別永代経志として
門信徒会へ	金一封	浜野須磨子殿	故	浜野 博寿様	香典返し

×より がよく見える『心の目』を大切に

カレンダー 11 月号 東井 義雄

×より がよく見える『心の目』を大切に

私は、校長を務めさせてもらった間、先生方に、いつも、「子どもの答案に をつけるときには、できるだけ大きくはつきりと、×は虫めがねで見ねば見えぬほど小さく、つけてやってください」と、頼み続けました。

そして、親ごさん方には「どうか を見てよろこびのことばをあげてください。そして、それを軸にして、×を にかえていこうとする意欲を育ててください」と、訴え続けてきました。

ある四年生の男の子は、お父さんに、つうしんぼをわたすと、じつと見ておられましたが、「うん、これならよかろう。おとうさんの四年のときより上トウじゃ」といわれた。

ぼくはうれしくなって、これからは、まい日勉強するぞと、けっしんしました。

と書いています。このお父さんのことばには、親としての、素直なよろこびの思いが輝いています。そのよろこびにふれて、この子は、見事に「やる気」を起こしています。

草や木は、太陽の光の方向に伸びます。子どもは、お父さん、お母さんのよろこびの方向に伸びます。この方向には、仏さまのよろこびがあるからです。

子どものいけないところは、責めるよりも、悲しみとしてください。悲しみの向うには、仏さまのお悲しみがあります。子どもは、それに触れて、自分の「非」に目め覚ざめていくのです。

どうも、いまの親ごさん方は「×」はすぐよく見えるくせに、「0」を見る力が、極めて弱いように思われます。「×」しか見えないままですと、老人になつてからも、ブツブツ、不平ばかりいって若い人たちから嫌われますよ。「 〇 」を見る目を大切にしてくださいっていると、老人になつて、お孫さんのお守をするようになつても、「わたしは、しあわせ者だ、こうして、毎日、かわいい孫のお守がさせてもらえる。孫が大きくなつて、いよいよもう失業かと思っていると、また小さいかわいい孫を産んでくれる。わたしはしあわせ者だ」というおばあさんになられるでしょうと、冗談まじりに訴え続けてきました。

「 〇 」と「×」、どちらがよく見えるか、「心の目の視力表」と考えて、度々自己点検していただく必要があるように思われます。

